

# 「矛盾文」の発話機能

大久保 朝 憲

はじめに

本稿は、フランス語で《Ce chat n'est pas un chat》のように、述語が名詞句となるコピュラ文（名詞述語文）で、主語名詞句と述語名詞句の主要部名詞が同一の語彙となる発話のあるタイプについての試論である<sup>1)</sup>。このような形式の発話は、一般に「矛盾文」と呼ばれるが、これは、「述定」についての古典的な見解、すなわち、主語名詞句がある対象を指示し、述語がそれになんらかの属性を付与するという見解に基づいた見方によるものである。この観点からみるかぎり、述語は、主語の指示対象同定のために使われる名詞Nと同じ名詞Nを否定におき、それを述語としているのであるから、ある対象が同時にNでありNでない主張されることになり、たしかに「矛盾」と言えるものである。同じ観点から、《Un chat est un chat》のように述語が否定されず、主語名詞Nがそのまま肯定で述定されるようなものは「同語反復文」とされ、この二つのタイプの文が発話されるのには、このような意味論的説明に加えて語用論的な説明がほどこされることが一般的なアプローチと言ってよいであろう。本稿の立場はこうした見方とはたもとをわち、このような「矛盾文」が成立する狭義の言語的環境を詳細に観察することによって、その意味機能を記述しようとするところみである。そして、さらにこのような発話の形式的特異性に注目し、これと、隠喩・誇張法などのいわゆる「修辭的」発話との意味論的關係も考えてみたい。

## 1. ほんとうに「矛盾文」か

はじめに明示しておくが、われわれは本稿で扱うようなタイプの発話を

「矛盾文」とは考えず、以下に述べる事由から、単に矛盾しているように見えるだけの発話として、「疑似矛盾的発話 *énoncés pseudo-contradictaires* (PCT 発話)」と名付けている (OKUBO (準備中) 参照)。まずこのことについて、観察のレベルを便宜的に文のレベルとテキストのレベルにわけて考えてみよう。

### 1.1. PCT 発話の成立条件：文のレベル

冒頭に述べたような形式的条件を満たす具体的な文形式としては、主要部名詞の数、定・不定のちがいなどでさまざまな形が想定されるが、本稿であつかうのは、次の (1) のように、主語名詞句が何らかの意味的限定を受け、述語名詞句が不定名詞句になることで、ある解釈パターンを得るものに限定する。

(1) a. *Ce chat n'est pas un chat.*

b. *Un chat qui ne chasse pas de souris n'est pas un chat.*

c. *Un chat, s'il ne chasse pas de souris, n'est pas un chat.*

これらの発話は、矛盾的であるように見える一方で、すでにこの文レベルで一定の解釈が可能であるが、そのためには、主語名詞句が、何らかの形で特定化の限定を受けていることが必須である。このことは次の (2) の解釈可能性が (1) にくらべてきわめて不鮮明になることから知られる。

(2) *Un chat n'est pas un chat.*

このように主語名詞句が、同じ主要部を持つ述語名詞句より意味的に限定されているということを確認するだけで、このような発話が「 $X \neq X$ 」のような意味での「矛盾文」でないことはあきらかではあるが、カテゴリー論的には問題が残っている。どのような限定を受けているにせよ、名詞 N で表示される要素はカテゴリー N のメンバーであり、特定の意味限定を受けた  $N+M$  (M は修飾限定要素) を特別にカテゴリーの外に出してしまうと、理論的な破綻が生じてしまう。問題の名詞述語文が、主語名詞句の指示対象が述語名詞句で表されるカテゴリーに帰属しているかどうかを述

定する（たとえば *Minou est / n'est pas un chat* のような）タイプの文であると解釈すれば<sup>2)</sup>、この発話では、N + M という個体がカテゴリー N に含まれないことを述定しているわけだが、M の存在それ自体は、問題を何ら解決しない。たしかに、修飾要素 M は、語彙的に N の N たるアイデンティティを無効にするような意味要素である場合 (3a) や、一般に N の「定義的属性」(3b)、あるいは「典型的属性」(3c) と呼ばれるような意味特性に抵触するような場合が多い。

- (3) a. Une perle *artificielle* n'est pas une perle.  
 b. Une bière *sans alcool* n'est pas une bière.  
 c. Un chat *qui ne chasse pas de souris* n'est pas un chat.

しかし、この「定義的属性」、「典型的属性」を特定すること自体が容易な作業ではなく、また、たとえ逆説的な印象を与えるにしても、つぎのような発話が可能であることは、カテゴリー論的解決にとって脅威となりうる<sup>3)</sup>。

- (4) a. Un colorant *naturel* n'est pas un colorant.  
 (有害添加物について話している文脈で)  
 b. Un chat *qui chasse des souris* n'est pas un chat.  
 (ペット化されたネコ以外受け入れられない話し手)  
 c. Une voiture *confortable* n'est pas une voiture.  
 (悪路走行などの愛好家)

さらに、《voiture》についてきわめて厳しい判断基準をもつ話し手による次のような発話は、カテゴリーのプロトタイプのメンバー（「平凡な車」）をカテゴリーから排除している点でさらに問題となる。

- (5) Une voiture *quelconque* n'est pas une voiture.

以上のことから、文レベルに観察の範囲を限定するかぎり、問題の形式の発話では、主語名詞が何らかの意味的限定を受けることが必須であり、主語名詞句と述語名詞句が完全に同じものではないということから、この形式の発話が単なる矛盾文ではないことが確かとはなったが、その意味的限定の具体的な特徴を語彙あるいは文のレベルで規定することは難しいこ

とがわかる。

## 1.2. PCT 発話の成立条件：テキストのレベル

### 1.2.1. 使用される語彙の発話への影響

PCT 発話のようなタイプの発話が、もともと文レベルの観察に向かないことは、その形式的単純さからもある程度自明であり、このような発話は、それによってつねにある特定のタイプの結論的発話に移行するものとしてなされることは、観察のレベルをテキスト、つまり発話の連鎖のレベルに広げることで明瞭に認識される。さらに、カテゴリー論的説明の限界もこのレベルでさらに明確となる。まず、この後者を示すために、同じく名詞述語文ではあるが、PCT発話とは若干異なる形式の発話について考えてみよう。

(6) Valéry écrit beaucoup sur les phénomènes linguistiques :

- a. Valéry est un *quasi*-linguiste.
- b. Valéry est un *pseudo*-linguiste.

(6a), (6b) いずれの発話においても、Valéry は、カテゴリー 《linguiste》の境界のぎりぎり外側に位置していると考えることができる。他方、これらの二つの発話の実際の機能は正反対といってよいほど違うものであることは、これらの語彙的意味によって知られることであるが、次のような発話に続けることでそれが如実に発現する。

(6') a. Valéry est un *quasi*-linguiste : tu peux mettre ces écrits dans la référence.

- b. Valéry est un *pseudo*-linguiste : tu *ne* peux *pas* mettre ces écrits dans la référence.

ここでわれわれがとくに考察の対象としたいのは、《quasi-》、《pseudo-》といった語彙そのものをどのように記述するかということではなく、これらの語彙の意味的な違いによって、発話のレベルで何がもたらされるかということである。一方で《quasi-》の使用によって、(6'a)のように、言語学者としてヴァレリーを見ることに肯定的な発話を後続させることがで

き、他方《pseudo-》の使用によって、同じ見方に関して否定的な発話を後続させることができるようになる。もちろん、この二つの語彙の使用が発話にもたらすものはこれだけではなく、ほかにさまざまな発話が続くことは言うまでもないが、少なくとも、これら二つの語彙の違いを際立たせるものとして、いまあげたような後続可能な発話の違いに言及することには、ある程度の有効性があるように思われる。

### 1.2.2. PCT 発話に結びつく発話

さて、それでは、PCT発話についても、同じような観点から考察してみよう。

(7) A: J'ai très chaud et soif. Tu n'as pas quelque chose de rafraîchissant?

B: Il y a de la bière dans le frigidaire.

A: Parfait! Mais toi qui ne supportes pas l'alcool, tu bois de la bière, maintenant?

B: Oui, mais, c'est de la bière sans alcool, tu sais.

A: Quoi? Une bière sans alcool n'est pas une bière. Non merci, je prendrai une autre chose...

A: Si tu veux, j'ai aussi de la bière 《non gazeuse》 qu'a laissé un ami il y a une semaine!

B: ...

上記会話中の下線部は、典型的な PCT 発話であるが、ここでは、話し手 A がこれにどのような発話を続けているかに注目したい。まず、PCT 発話の主語および述語名詞に用いられているのは *bière* で、これは言うまでもなく飲み物である。したがってわれわれはフランス語のこの単語についての知識から、(その他のさまざまな可能性のうちからたとえば) 次のような発話を連続させることができる。

(8) C'est une bière: je vais donc la boire.

これに対して、次の (9) のように続けるためには、この単語について

の知識以外のものが必要である（たとえば話し手はアルコールの摂取を禁じられているなど）<sup>4)</sup>。

(9) C'est une bière: je ne vais donc pas la prendre.

このような観点から(7)の中のPCT発話および後続発話を見ると、これはつぎのようにまとめることができる。

(10) Une bière sans alcool n'est pas une bière: je ne vais donc pas la boire.

述語内で、名詞句 *une bière* が否定されているおかげで、この連続はきわめて自然で、また、PCT発話をつねにこのような連続をもらたし、このような後半部を主張するために発話されていると考えてもよいであろう。つまり、《*bière*》と《*boire*》という語彙の使用面で、つぎのように図式的に表記できる関係があると考えられる。

[*bière* DONC *boire*]

[NON-*bière* DONC NON-*boire*]

つまり、PCT発話には、主語および述語名詞が語彙的に導く帰結のひとつを否定する発話を自然に導くという特徴がある。

(11) a. Une perle *artificielle* n'est pas une perle, donc je ne l'ai pas achetée.

b. Une bière *sans alcool* n'est pas une bière, donc je ne l'ai pas bue.

c. Un chat *qui ne chasse pas de souris* n'est pas un chat, donc je l'ai abandonné.

ただし、ここで注意しなければならない点が2つある。まず初めに、われわれは、PCT発話が上記のような発話をいつも必ず導くと主張しているわけではない。人工真珠は真珠ではないと断言しつつ、それでも購入する旨を述べる発話を続けることは可能である。ただし、いまでもそれを「それでも」と続けたように、二つの発話のつながりかたに根本的なちがいがあらわれることは無視できない事実である。

(12) a. Une perle *artificielle* n'est pas une perle, je l'ai pourtant

achetée.

- b. Une bière *sans alcool* n'est pas une bière, mais je l'ai quand même bue.
- c. Un chat *qui ne chasse pas de souris* n'est pas un chat, pourtant je le garde toujours.

ただ、(12)の各発話においても、斜字体のそれぞれの要素が、(11)のような発話のつながりを導きうる修飾要素として機能していることには変わりはなく、だからこそ《pourtant》、《quand même》などの譲歩的な表現が必要となるのである。

2つめの点は、前節で述べたことにも関係するが、斜字体でしめした修飾要素は、あらゆる可能な文脈で同様に機能するわけではないということである。たとえば、つぎの2つの例を比較してみよう。

- (13) Un chat *qui ne chasse pas de souris* n'est pas un chat, donc je l'ai abandonné. (= (11c))
- (14) Un chat *qui chasse les souris* n'est pas un chat, donc je l'ai abandonné.

(11c)と(12c)のそれぞれの発話は、後続の発話が意味的に対立しているにせよ、ネズミ駆除の道具としてネコを見ていると言う点で共通している。それに対して(14)は、たとえばネズミを捕るような本能をまだ持っているようなネコはペットとしてのネコとは言えないという「ネコ観」に基づいており、*qui chasse les souris* という意味的に正反対の修飾要素が、同様の発話のつながりをもたらしている<sup>5)</sup>。

以上、文レベルとテキストレベルでのPCT発話の成立環境をまとめると、つぎようになる。PCT発話は、主語名詞句内主要部名詞と述語名詞句内主要部名詞が同じ語彙Nによってなりたつ名詞述語文で、主語名詞は、何らかの形で意味的な修飾Mを受けていなければならない。またそのことによって、名詞Nの語彙の意味を持つ自然な発話のつながりのひとつ(C'est un N, donc X)が阻害され、意味的に逆転した発話のつながりが

生じる (C'est un N+M, (donc ce n'est pas un N), donc NON-X)。これらの確認事項をもとに、次の章で、「論証力 force argumentative」という概念を導入して、PCT発話の発話機能を明らかにしてみたい。

## 2. 「論証力」と PCT 発話の発話機能

これまでの観察からもわかるように、本稿では、意味論を、言語表現に対応する「表象」、あるいは言語表現がその中に含み持っているとする「属性」を想定し、それを明らかにする方向ではなく、ある言語表現の使用が、ほかのどのような言語表現と意味的に結びついているかということを手がかりに考察をすすめている。ある言語表現を、別の言語表現との意味的結びつきに基づいて後続する発話として使用するということは、「説得」などの行為において明示的に、あるいは方法的にもちいる基本的手順と言えるが、われわれは、Ansombre と Ducrot によってうち立てられ、その後さまざまな変遷を経た言語内論証理論 *théorie de l'argumentation dans la langue* の基本的な考え方を受け継ぎ、日常的なわれわれの発話の意味を、それによってつぎにどのような発話をおこなうことをうながしたり禁じたりするかという意味での「論証 argumentation」と考えることによって記述しようとする。現在の理論は、その後の変遷を経て、さまざまな理論的概念装置をともなうものになっているが、ここでは、本稿のPCT発話の分析のために、「論証力 force argumentative」の概念<sup>6)</sup>を導入する。

### 2.1. 論証力と非現実化修飾子

「論証力」とは、ふたつの言語表現を結びつける力のことで、この力が強ければ強いほど、ふたつの言語表現の継起が容易になり、その容易さの相対的な度合いを「力」に類比したものである。ふたつの言語表現を X, Y とし、これらは接続詞 *donc* によって結びつけることができるものとする (たとえば X: 《il fait beau》, Y: 《allons nous promener》)。いま、Y とやはり *donc* によって結びつきうる別の言語表現を X' (たとえ

ば《il fait très beau》)があり、X' donc Y が X donc Y よりも強い論証力を持つ、すなわち、X' のほうが X よりも donc を介して Y と結びつきやすいとき、《X, et même X'》(《il fait beau, et il fait même très beau》) が成り立たなければならないというのが、論証力の強弱をはかるための基準とされている。論証力のこのような強弱は、言語表現内のさまざまな要素に影響されるが、ある発話 X donc Y 内の言語表現 X を修飾する修飾要素 M が影響を与え、発話 X+M donc Y の論証力を弱める場合がある。このような修飾要素は DUCROT (1995, 1998) で「非現実化修飾子 *modificateur déréalisant (MD)*」と呼ばれ、《X, mais X+M》と言えることがその基準として挙げられている。次の例で、形容詞 *éloigné* は名詞 *parent* に対して、また副詞 *lentement* は動詞 *avancer* に対して非現実化修飾子としてはたらいっている。

(15) Pierre est un parent, mais un parent *éloigné*.

(16) X a avancé, mais *lentement*.

## 2.2. 逆転型 MD としての PCT 発話内の修飾要素

1章でみたように、PCT 発話の主語名詞句は何らかの形で意味的限定を受けているが、この修飾要素は上に述べた MD にあたり、《X, mais X+M》の基準もみたしている。

(17) C'est un chat, mais un chat *qui ne chasse pas de souris*.

(ネズミ駆除用家畜としての chat)

(18) C'est un chat, mais un chat *qui chasse les souris*.

(おとなしいペットとしての chat)

(19) C'est une bière, mais une bière *sans alcool*.

(20) C'est une perle, mais une perle *artificielle*.

さらに、PCT 発話内の MD は、被修飾要素 X の論証力を弱めるだけでなく、実際には逆転させる力を持っている。このような MD は、とくに「逆転型 MD (MD-inverseur)」と呼ばれ、単に論証力を弱めるだけの「軽減型 MD (MD-atténuateur)」と区別されている。逆転型 MD のもっ

とも極端な例は、たとえば否定の接頭辞 non- である。

- (21) a. C'est un francophone, donc on n'a pas besoin d'interprète.  
 b. C'est un non-francophone, donc on a besoin d'interprète.

つまり、「論証」という観点からは、逆転型 MD は、否定辞と同じように機能するということである。

- (22) C'est un francophone, mais *débutant*, donc on a besoin d'interprète.

では、もういちど 次の (23) の例で、PCT発話全体を観察しなおしてみよう。

- (23) Une voiture inconfortable n'est pas une voiture : je ne vais donc pas la prendre pour y aller.

1章では、PCT 発話のテキストレベルの特徴として、名詞 N の語彙的意味を持つ自然な発話のつながりのひとつが阻害され、意味的に逆転した発話のつながりが生じると述べた。名詞《voiture》が、乗り物として《C'est une voiture, donc je la prends pour y aller》という自然な発話のつながりをもつものに対して、(23) では《je ne vais donc pas la prendre pour y aller》となることが逆転を表していると言えるが、実は、上で見たように 主語名詞句の修飾要素である《inconfortable》は逆転型 MD であり (c'est une voiture, mais une voiture inconfortable), これだけで、つまりそれを《...n'est pas une voiture》とまで述定しなくとも、発話のつながり自体は逆転可能である。すなわち、

- (24) C'est une voiture inconfortable, je ne vais donc pas la prendre pour y aller.

も、発話のつながりとしてはきわめて自然であるということである。しかし、印象レベルでは、(23) の発話はより力強く、「乗らない」という断言に有無を言わせないところがある。これはどのような事情によるのだろうか。(24) を次の (25) に比較してみよう。

- (25) Ce n'est pas une voiture (C'est une non-voiture), je ne vais donc pas la prendre pour y aller.

先に、MD、つまり非現実化のもっとも極端なものが否定辞だと述べたが、(25)は、(24)によって逆転された《voiture》の論証力をその極にまで高めたものにとらえることができる。また、そのことによって、逆転された論証そのもの、つまり(25)の発話全体の論証力は、(24)のそれよりも強まることになる。

(26) C'est une voiture inconfortable, je ne vais donc pas la prendre pour y aller.

C'est *même* une non-voiture, donc je ne vais pas la prendre pour y aller.

以上のことから、われわれは、(23)の発話は、論証的側面に注目すると次のように書き換えることができると考える。

(27) C'est une voiture inconfortable, *c'est-à-dire* que ce n'est pas une voiture, je ne vais *donc* pas la prendre pour y aller.

つまり、PCT発話を、単なるコピュラ文ではなく、論証的には、主語名詞句をもちいてなされうるひとつの「述定」を述語名詞句でパラフレーズ(《*c'est-à-dire*》)した複合的な発話にとらえるのである。このようにとらえなおすことで、PCT発話の以下のような2段階の意味機能をより明示的に認識することができる。まず、主語名詞句の修飾要素で、名詞 *voiture* の逆転型 MD である *inconfortable* によって、名詞 *voiture* が持ちうる論証、つまり発話のつながりのひとつが逆転される。さらに、PCT発話の述語《...n'est pas une voiture (non-voiture)》によって、その逆転は極にまで強化され、逆転された発話のつながり全体の論証力はきわめて強いものとなる。先に述べた印象レベルでの断言性の強さは、以上のプロセスから生じるのである。逆転型 MD としてもっとも強力なのは否定辞であるが、他方否定辞だけでは、意味的抽象度が高すぎて、論証力を逆転された名詞の発話がどのようにつながっていくことが阻害されたのかを特定することができない。つまり、《*ce n'est pas une voiture*》というだけでは、そこから自然につながる発話の可能性の範囲があまりにも広すぎる(《*donc je peux la conduire sans permis*》, 《*donc je ne paie pas*

les impos pour ça》, etc.) ので、それを MD が特定しているのである。逆に言うと、MD で方向が特定された逆向きの論証力を否定辞が極にまで引き上げることが PCT 発話では起こっているのだ。これはほかの例についても同様である。

### 3. PCT 発話の修辞性：隠喩・誇張法との相関

PCT 発話はきわめて修辞性の高い発話である。そのことを論証力の概念をつかって考えてみよう。2章で、このタイプの発話は、二つの発話が主語と述語に凝縮してひとつの発話のようになったものという言い方をしたが、これは次のようなパラフレーズ関係に一般化できる。

(28) C'est un N+MD-inv, c'est-à-dire que c'est un NON-N, donc Y.

NON-N donc Y のほうが、N+MD-inv donc Y よりも論証力が強いことから、PCT 発話は断言性の強い、説得力のある発話となるのだが、他方、ここには一種の独善性を感じられる。これは N+MD c-à-d NON-N というところにある。これは論証力の弱いものを、より強いものに、c'est-à-dire で言い換えているわけで、論証的な面だけに注目すれば、次のような発話と同断である。

(29) Il ne pleut pas beaucoup, c'est-à-dire qu'il ne pleut pas du tout, donc allons-nous promener.

これは一種の誇張法的な表現であり、PCT発話も、論証的には誇張法と同じ構造をもち、ともに、発話の論証力を強めて、導きたい結論に至りやすくなるという利を得ると同時に、発話の信憑性のようなものを犠牲にしている。さらに言えば、隠喩的発話の少なくとも一部についても同様のことが言える。ここではごく初歩的な語彙化した隠喩の例のみを見ておこう。

(30) Marie est une femme très violente et jalouse, c'est-à-dire que c'est une tigresse. Il faut donc bien se méfier d'elle.

隠喩の解釈についての複雑な議論はここでは考えず<sup>7)</sup>、隠喩の論証的側面だけに注目する。隠喩表現のもつ「強さ」は、それにつながる発話との

結びつきにおける論証力の強さに読みかえられる。われわれが「信憑性」を犠牲にして隠喩のもつ論証力にうたえるのは、PCT発話や、誇張法における場合と同じである。

## 展 望

本稿であつかった PCT 発話や、われわれが「PTT (pseudo-tautologie) 発話 (疑似同語反復的発話)」と呼ぶ《un chat est un chat》タイプの発話についての従来の議論はさまざまではあるが、煎じ詰めれば、主語名詞句内の主要部名詞 N と述語名詞句内のそれとの意味が違い、それが PTT 発話を単なる矛盾文ではなくし、PTT 発話に同語反復以上の価値を持たせるというものであった。われわれは、同じ単語が環境・文脈によって意味を変えらるるということを認めるのにやぶさかではないが、その変わり方がどのような契機によるものかということの記述については、それが場当たりのにならないようにできるかどうかというところで大いに疑問を抱いている。そこで本稿では、N そのものの意味表象に依拠せず、その使用、発話にあたっての「意味的環境」と呼べるようなものを考察し、とくに「論証力」をキーワードに、当該発話がどのようなほかの発話と結びついているかということに注意を集中して、PCT 発話についての別の観点からの記述をこころみた。疑似同語反復文的発話についても、これと平行した記述をすすめ、これら二つのタイプの発話の機能を隠喩などの修辭的発話との相関を考えながら明らかにすべく、現在別稿も準備中である。

(本学専任講師)

## 引用文献

- CAREL, Marion (1999). 《Lexique et argumentation》. dans *les Actes du XXXIIe congrès international de linguistique et philologie romane*.  
 CAREL, Marion & DUCROT, Oswald (1999). 《Le problème du paradoxe dans une sémantique argumentative》, *Langue française*, 123.  
 DUCROT, Oswald. (1995). 《Les modificateurs déréalisants》 *Journal of Pragmatics*, 24, : 145-165.  
 DUCROT, Oswald. (1998). 《Quand peu et un peu semblent coorientés:

*peu après et un peu après*), dans LEEMAN, Danielle, BOONE, Annie (éds.) *et alii, Du percevoir au dire - Hommage à André Joly*, L'Harmattan.

DUCROT, Oswald & CAREL, Marion (1999). 《Les propriétés linguistiques du paradoxe : pradoxe et nénation》, *Langue française*, 123.

OKUBO, Tomonori. (準備中). 《Analyse argumentatives des énoncés pseudo-tautologiques et psuedo-contradictaires》.

大久保朝憲 (2000). 「擬合同語反復文・擬似矛盾文の分析」 『関西大学文学論集』 (巻号未定), 関西大学文学会

#### 注

- 1) したがって例文はすべてフランス語によるが、議論の大筋は、個別言語の別を問わない現象である。また、例文の日本語訳、もしくは英訳を必要とされる読者は以下までご一報いただきたい。tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp
- 2) もちろんこのように考える必然性はないが、そうでなければ、件の文についてほかの説明が必要であろう。
- 3) ここで言う「逆説」についての詳細は、CAREL & DUCROT (1999), DUCROT & CAREL (1999) を参照のこと。
- 4) (9) にたいして、つぎのような発話の連続は (8) と同様の自然さで容認できる。《C'est une bière: je ne vais *pourtant* pas la prendre.》これは単なる接続詞による微調整ではなく、発話の方向付けについての大きなちがいである。これについては CAREL, DUCROT らがここ数年活発に議論を進めている。後述部分も参照。
- 5) このようなことは、本稿の問題に特有のことではなく、きわめて基本的な言語の特徴のひとつである。CAREL (1999その他) がしばしば引用する例だが、Il est tard という文自体はこれだけでは何も意味しておらず、現にこれに続けてわれわれは Il est tard, donc le train est là という場合 (列車がもう着いている) もあるし、Il est tard, donc le train n'est pas là と続ける場合 (列車は行ってしまった) もあり、後続部分とのつながりで文の意味が確定される。これと同様にして、un chat chasse les souris という文そのものにも、これだけで独立した解釈をうながす意味があるとは言い難いと言うことができる。
- 6) この概念についてのくわしい議論については、DUCROT (1995) を参照。

- 7) また、(30) のような例を掲げるからと言って、*tigresse* の意味内容が、*violente*, *jalouse* に置き換えられると言っているわけでもない。ほかのどのような要素でもよいが、要するに *tigresse* よりも論証力の弱い述語がくればよいのである。